

「資本論を読む会」便り

No. 26
2017.9.14

第27回は商品の物神性のところの4回目でした。わずか3段落しか進みませんでした。その分、中身は濃かった？

◆第27回の内容

※ 編集人の復習ノート。議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということです。小見出し直後のゴシック体は当該段落の要点、丸ゴシック体は本文やレジュメの要約です。原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店 全集版 による。段落は本文の字下げごとに数える)。文中の[第1文]等の「文」は、句点(.)で区切られた文章の要素です。

第1巻 第1章 第4節 商品の物神的性格とその秘密

【前回の復習】

前回のまとめのあと、今回のところに進みました。

【第10段落】(89) 人間生活の諸形態の考察、…

商品経済の科学的分析は、商品形態の完成形…貨幣や価格の分析から始まった。だが、貨幣形態は、私的労働の社会的性格を物的関係として現わし、これを隠す。

(1) ① 人間生活の諸形態に関する考察・科学的分析…発展過程の既成の諸結果から始まる。

② 労働生産物を商品にする[商品流通の前提となる]諸形態(貨幣や価格)は、人間たちが、この諸形態の内実について解明しようとする前に、

[諸形態の歴史的な性格ではない。彼には諸形態は不変な存在]

すでに社会的生活の自然形態の固定性を持っている。

③ ・価値量の規定 ← 商品価格の分析

・価値性格の確定 ← 商品の共通な貨幣表現

[第1～4文]

(2) 貨幣形態(商品世界の完成形態)は、私的労働の社会的性格を物的関係として現わし、これを隠す。 [第5文]

(3) ・上着、長靴等がリンネル(抽象的人間労働の一般的具体化)に関係する、は奇異な表現

・上着、長靴等を一般的等価物としてのリンネル(or 金銀)に関係させる

生産者たちにとって、私的労働の社会的総労働に対する関係が、奇異な形態で現われる。

[第6～7文]

この段落も読み進めるのに時間がかかりました。

最初の一文、(1)①の「発展過程の既成の諸結果」とは、発展の結果生まれた、既に存在しているもの、ということでしょう。分析を始めるには、分析の対象物がなくては始めようがな

いわけです。

経済学が分析の対象とした貨幣ですが、貨幣の発明は数千年前のようです。しかし、貨幣が社会の隅々まで行き渡り使われるようになるのは、近代以降でしょう。

この時代以降、生産物は売って貨幣に換え、生産財や消費財は貨幣でもって購入することが、普通のこととして行なわれています。そんなこと当たり前だろ、と、誰しも思っています。また、貨幣なしでやっていくこともできません。(1)②の「労働生産物を商品にする[商品流通の前提となる]諸形態(貨幣や価格)は、……、すでに社会的生活の自然形態の固定性を持っている。」とは、このような状態を指していると思います。

ここで「商品流通」という語が初めて出てきましたが説明がありません。貨幣を媒介とした商品交換の全体を指します。第3章に説明があります。

あと、「人間たち」とはどんな人たちかということですが、貨幣や価格の科学的分析を始めたのは古典派経済学の人々でしょう。

(1)③ こうして、古典派経済学の人々によって、貨幣や価格の分析から価値量や価値の性格が明らかにされました。

ところで、科学的に分析を始めようとした諸形態(貨幣や価格)の「内実」ですが、その「歴史的な性格ではない。」とあります。貨幣や価格といったものが、すでに完成品だから歴史的な性格は問題にされなかった、ということなのでしょう。議論の中で、歴史的観点から商品や貨幣を見るのは難しいことだ、という指摘もありました。

次に(2)です。貨幣形態を商品世界の完成形態といっていますが、第3節 価値形態の最後が、D貨幣形態であったとことと符合します。

私的労働の社会的性格が物的関係として現わされることについては、第3, 4段落で説明されています。商品交換に貨幣が入ることで、これらの物の関係は生産者たちの社会的関係の反映である、ということが、いっそう見えにくくなるという訳です。

ここでは、これまでに何回も出てきていますが、「私的労働の社会的関係」の意味が分かりづらく議論になりました。

物を生産する場合、それは生産者自身が「勝手に」生産しています。この労働が私的労働です。この製品は売れるはずだと考えて生産します。つまり交換(販売)が目的です。自分で使用するのが目的ではなく、他人の使用価値を生産します。こうして、生産者の労働が別の生産者と関係を結ぶことになり、社会的関係を形成します。しかし、貨幣が生産物の交換を媒介することで、生産者の労働相互の関係がより背後に押しやられることとなります。

最後に(3)です。編集人が「奇異」の意味が分かりづらいと言ったところ、参加者の皆さん持参のテキストにより、倒錯した、ばかげたという訳もあるとのことでした。

では「上着や長靴などが、抽象的人間労働の一般的な具体化としてのリンネルに関係する」のどこが奇異だと言うのでしょうか。それは、人間の活動(抽象的人間労働)が、商品の価値という対象的存在となり、しかもそれが価値の化身としてリンネルという物体になっていることです。

したがって、上着や長靴などを一般的等価物としてのリンネル(or 金銀)に関係させる生産者たちにとって、私的労働の社会的総労働に対する関係が、奇異な形態で、つまり物と物との関係として現われることになります。

◆古典派経済学について、次のような文を見つけましたので紹介します。

アダム・スミスに代表される古典経済学は、資本主義社会の生産諸関係の内的関連を探求することによって経済学を科学にした。しかしそれは資本主義的生産を、したがってまた商品生産を、社会的生産の自然的な形態と見なしていた。だから彼らは、商品の価値は労働なのだということは探り出したけれども、なぜ、労働はそのまま労働として現われないで、その生産物の価値というかたちで、「物の属性」という奇妙なかたちで現われるのか、なぜ、自分たちはわざわざこのような形態を分析して価値の実体が労働であることを発見しなければならない、というようなことになっているのか、こうした、経済学が解明すべき肝心な問題の、彼らは理解することはおろか、問題として提起することさえしなかったのである。さらに彼らは、資本主義的生産を社会的生産の永遠の自然形態と見誤っていたので、この生産の最も抽象的な、しかしまた最も一般的な形態である労働生産物の商品形態の独自性を見逃し、価値形態を研究しようとしなかった。(大谷禎之介: 商品および商品生産, 経済志林, Vol. 61, No. 2, 1993年, p97)

【第11段落】(90) このような諸形態こそまさにブルジョア経済学の…。

商品の物神性は、客観的なものであり、商品世界に特有である。

(1) 商品流通に前提されている諸形態(段落10)がブルジョワ的経済学の諸範疇をなす。

歴史的に規定された社会的生産様式, 商品生産, 生産関係に妥当した客観的な思想形態

(2) 商品世界の神秘性(商品の物神性)は商品世界に特有なもの。他の生産様式にはない。

まず、「ブルジョワ経済学」とは資本主義を対象とした経済学です。古典派経済学と言い換えても良さそうです。国民経済学のことだとの指摘もありました。

次に、「範疇(カテゴリー)」とは広辞苑によると、

- ① 存在のもっとも基本的な概念(例えば実体・因果関係・量・質など)。
- ② 個々の科学での基礎となる観念。数学における数の観念など。
- ③ 同じ種類のものの所属する部類・部門。

ですが、ここでは①～②の意味です。基本概念と言い換えることができます。

商品・貨幣・価格など(商品流通に前提されている諸形態)が経済学の基本概念であるが、商品社会の生産様式・生産関係に妥当する客観的な概念です。

商品の物神性は、労働生産物が商品として現われることから生ずる、客観的な現象です。単に、そう見えるといった主観的な現象ではありません。

そういうわけですから、商品生産ではない社会では、そのような現象は現れません。

【第12段落】(90) 経済学はロビンソン物語を愛好するから、…。

ロビンソンの労働とその生産物の関係は単純明白で、神秘性はない。

- (1) 経済学はロビンソン物語を愛好するから…。(注29) [第1文]
- (2) ① ロビンソンの各種の有用労働は、同じロビンソンの(人間労働の)いろいろな活動形態
ロビンソンはこれを自覚
- ② 自分の時間を自分のいろいろな機能のあいだに正確に配分
必要と仕事の困難度から(経験が教える)。
- ③ 記帳 ・ 使用対象 ・ 生産に必要な作業,
・ 生産物の一定量に平均的に費やす労働時間 [第2～10文]
- (3) ① 生産物と労働の関係は単純明白。神秘性はない。
- ② 価値の一切の本質的な規定を含む。(価値規定の内容) [第11～12文]
- ・ すべての労働は人間の身体活動
 - ・ 生産物は一定の労働の量が必要
 - ・ 互いのための労働は社会的形態を持つ(ロビンソンは一人だが)

(1)は、ロビンソンを例解に出す理由を言っています。

そして(2)でロビンソンの労働の特徴が述べられていますが、(3)のまとめにあるように、生産物と労働の関係は単純で、個別の労働と総労働の関係も明確です。

「価値の本質的な規定を含む」とあるので、価値規定の内容を要約のところに書き並べました。これらの内容をロビンソンの労働の中に確認することができます。しかし、生産物は商品にならず価値という属性もありません。

なお、ロビンソン一人の島で「社会的」形態、というのは理解しにくいところです。午後狩りに出かけるロビンソンのために、午前のロビンソンは矢を作っている、みたいな状況が頭に浮かびましたがどうでしょうか。

商品の物神的性格、人と人との関係が物的関係として現われることに係わって、労働者の孤立化が話題になりました。労働力が貨幣を媒介として社会的につながりを持つが、その分人と人とのつながりが希薄になり、孤立化し、バラバラにされているのではないだろうか、ということです。

原注29の中に「オーウェンの平行四辺形」というのが出てきます。マルクス・エンゲルス全集(ドイツ語版)編集部注解によれば、「…オーエンは、そのユートピア的な社会改造計画のなかで、集落が平行四辺形または正方形の形態で設けられれば、経済性の立場からも、居住性の立場からも最も合理的であるということを実証しようとした。」とのことでした。